

地域との交流

札幌国際センター・帯広国際センター

「2008ワールド人間ばんばチャンピオンシップ」 —帯広・十勝の農耕の歴史を伝える競技に挑戦—

帯広国際センターの研修員25名(選手12名、応援13名)が、10月19日(日)、帯広競馬場で開催された「人間ばん馬」大会に参加した。この「人間ばん馬レース」は、「世界で唯一のばんえい競馬を応援しよう!」と昨年開催した「とちばん馬まつり」のメイン事業として始まった。帯広・十勝の農耕の歴史を伝える「ばんえい競馬」を後世に残そうと、馬を人間に置き換えた競技で、地域の新しい魅力になっている。



7番ウィナーズ



6番「百馬力」チーム



寒くて、熱い1日でした

研修員が参加したのは大会2日目の「2008ワールド人間ばん馬チャンピオンシップ(世界大会)」で十勝内外から25チームが参集した。研修員たちは、6人組(内1名は女性の騎手)で“Hundred Horsepower(百馬力)”と“Winners(勝者)”の2チームを結成した。同競馬場の本馬場200mのコースの前半を騎手が走って110m地点でスタンバイするソリに騎乗、後半90mを重量180kgのソリを引っ張り高さ1.7mの障害を越えてタイムを競った。小雨模様で肌寒い日であったが、出走者たちは想像以上にソリが重くて苦戦しながらも、珍しい競技を楽しんでいた。

主催は「ばん馬と共に地域振興をはかる会」で、帯広商工会議所青年部(帯広YEG)が中心となって運営した。

華道教室を開催 —秋の花材で生け花—



10月21日(火)夜、札幌国際センターの会議室で塚野直緒美先生を講師に華道教室を開催した。開始時間の午後7時前から、中国、ブルキナファソ、トンガ、ジャマイカ、スリランカ、ラオス、

コートジボアール、コンゴ、マダガスカルなどの研修員が集まり、総勢20名ほどが参加した。

簡単な自己紹介のあと、塚野講師から花を生ける時には「天・地・人」という型があることなど基本的な考え方が説明され、さっそく用意された花材で「盛り花」に挑戦した。

全員が生け花は初めてということで、初めは開いた花材をただ見ていたり、なかなか鉢を入れられなかったりと、とまどった様子であったが、講師に剣山に挿す角度を「この角度でいいですか」とか、各枝の高さの割合を質問したり、参加のボランティアの方3名に手伝ってもらったりしながら、次第に作品づくりに熱がこもっていった。なかには、我関せずとばかりに自分の世界に没頭して作品を仕上げる研修員の姿も見られた。

この日の花材は、ユキヤナギ、スプレー菊、レモンリーフと秋らしい組み合わせで、完成した全員の作品が1階のロビーに飾られた。



地域の活動

北方圏センター30周年協賛『ブラジル料理講習会・試食会』

10月5日(日)、ブラジル国の料理講習会・試食会が、北方圏センター設立30周年協賛事業として開催された。この事業は、ブラジル料理に親しむ機会と、異文化に対する関心を高めることを目的とし、北海道日伯協会が毎年「シユラスコ会」として開催しているもの。当日は、天候にも恵まれ、ブラジルの定番料理を味わおうと、豊平区月寒にある学校法人八紘学園内の会場に、留学生・研修員、関係者や一般市民など約200人が集まった。松田利民北海道日伯協会会長の挨拶に引き続き、講師の日伯協会会員の守下さんから、炭火で牛肉を焼くシユラスコ(牛肉)やフェイジョアーダ(豆と豚の耳や鼻・足などを煮込んだものをご飯にかけて食べる料理)・パステル(ブラジル風揚げ餃子)・ピンガ(ブラジルの地酒)などブラジルの代表的な料理が紹介された。



人気の「シユラスコ」



会場風景



パステル(左上)コウビ(右上)フェイジョアーダ(下)

よく調理され、参加者に振る舞われた。中でも1番人気はやはりシユラスコで、ブースの周りに人だかりができるほどだった。当センターで受け入れている南米からの留学生や研修員たちもパステルの調理に参加し、餃子の皮にひき肉やチーズを入れて包み大量に仕込みをして用意したパステルを次から次へと揚げていき、好評な売れ行きに忙しくも満足げな様子であった。熱心にレシピを尋ねる人達の姿も見られた。30周年の協賛事業ということもあり、例年より多くの参加者が訪れ、ブラジルの味覚を味わいながら楽しく懇談し、短い秋の一日を過ごした。